

1 はじめに

備前市文化協会『創立 25 周年記念誌わがまちの文化遺産』で、**大内神社**(備前市香登本)の**古代文字**を知った。平成 22 年 6 月 21 日に延原勝志氏より古代文字の写真が送付されてきた。**香登の初見**は、『続日本記』文武 2 年(698)四月壬辰条「**佚儒備前国人秦大兄**。賜姓**香登臣**」である。大内神社社記に「大宝年中(701~704)香登臣**秦大兄**修繕」との記録がある。岡山県史編年資料は、「**備前国の人秦大兄に香登臣を賜姓する**」と説明している。

元禄 16 年(1703) **建立**の本殿は備前市指定有形文化財であり、弘安 8 年(1285) 備前国百廿八社神位付神名帳の和気郡九社の中に**正二位大内大明神**とある。

祭神 : 大山津見神、大市比売神、木花之佐久夜毘売神、**大香山戸臣神**。



大内神社



古代文字

2 大内神社の古代文字

備前市文化協会『創立 25 周年記念誌わがまちの文化遺産』に、「**拝殿の向拝、唐破風(からはふ)は、古代文字を彫刻した兔の毛通し**を付けている。」とある。「唐破風」は、反転曲線をもった山形の破風。曲線の接点(腰)に**茨**がある。同様の反転曲線で屋根全体が出来ているものを唐様という。「**兔の毛通し**」とは、唐破風の中央につく**懸魚**。普通の懸魚より平たい。古代文字はアルファベットであるが、現在使用されている英語のアルファベットでは無い。

3 熊山遺跡と原始キリスト教遺物

仙田 実氏は大内神社近くの熊山遺跡より発掘された遺物を層別し、「**道教・仏教・儒教・ヒンズー教とアジア大陸の主要宗教を網羅している。**」と報告している。

地名学より吉備国の語源、**黄蘗の蘗は突厥国からの渡来者**を意味している。**アジア大陸の主要宗教が渡来して当然**である。

私が注目したのは、**原始キリスト教(景教)遺物が発見されていないこと**である。西暦 600~640 年頃、唐の首都長安にペルシア寺が建立され、712 年頃に大秦教寺と名称変更されている。**天平 8 年(736)に、景教徒が日本を訪問し聖武天皇と会見した**ことが『続日本紀』に記録されている。**景教とは古代ユダヤ教**である。

3.1 伊勢の語源 ロシア共和国 イセーティ川 (Iset) よりの渡来人・伊勢津彦命

伊勢津彦命を渡来人と推定し伊勢津の語源を地名学より考察している。ウラル山脈東部の標高 250m に位置するイセーティ湖に源を発する。イセチ川 (英語: Iset、ロシア語: Исеть) は、ロシアのスヴェルドロフスク州、クルガン州、チュメニ州を流れる川。トボル川の左支流で、最終的にエルティシ川・オビ川を経て北極海へ流れている。全長 638km、流域面積は 58,000 平方 km。11 月から 4 月にかけては凍結する。ウラルを超えてきた旅人がここから船に乗りオビ川水系を東へ旅していた。



3.2 ロシア語とキリル文字

キリル文字とはロシア語で使われる文字である。旧ソ連に属した多くの国や、その周辺にある国々でも自国の言葉を表す文字として使用されている。9 世紀にスラブ族に派遣されたブルガリアの宣教師キリルが、キリスト教を広めるためにギリシア文字を元にして考案した文字である。ギリシア正教とともに東ヨーロッパに広まった。キリル文字は長年にわたり、広くスラブ諸言語の書写に使用されている。キリル文字の初見は、ブルガリア帝国のシメオン皇帝が即位した 893 年とされている。

3.2.1 キリル文字の特長

ロシア語で使用される文字数は 33 文字 (キリル文字は 43 文字) で、形はアルファベットに似ている。キリル文字はオンシャル(大文字)字体から考案されている。

ローマ字より母音も子音も文字の種類が豊富で、日本語の音を 2 文字の組み合わせで表すことができる。「きゃ」はローマ字では「kya」で、キリル文字なら「кя」となる。文字の並べ方はローマ字と同一に左から右へ横書きする。上から下へ行をならべる。

文の最初の文字や、人名地名などの最初の文字は大文字を使う。言葉と言葉の間は空けて分けて書く。点は「,」、丸は「.」を使用する。

大文字	А Б В Г Д Е Ё Ж З И Й К Л М Н О П Р С Т У Ф Х Ц Ч Ш Щ Ъ Ы Ь Э Ю Я
小文字	а б в г д е ё ж з и й к л м н о п р с т у ф х ц ч ш щ ъ ы ь э ю я

3.3 イエズス会とキリル文字

16 世紀のイエズス会の布教活動が知られている。アジア各地にキリスト教宣教師が派遣された。ラテン文字、キリル文字は布教のための聖書や賛美歌を書き表す手段として使用された。

3.3.1 キリル文字説

大内神社の古代文字とキリル文字とを比較した。類似している。古代文字は大内神社本殿が元禄 16 年 (1703) に再建された時に、関係者の記憶により製作されたものである。

「が」が「L」、「ト」が上下逆に彫刻されている。キリル文字については、小林 潔著『ロシアの文字の話』収録を紹介したい。



古代文字

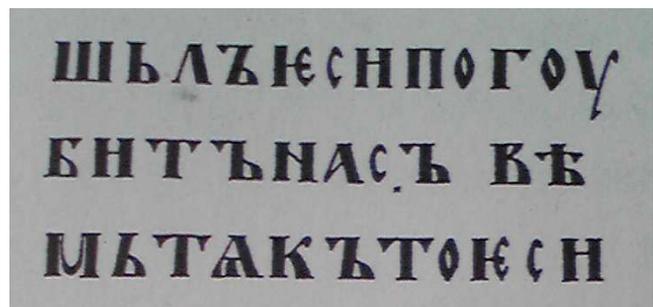


『測地学』表紙 1708 年 モスクワ

表 2 : キリル文字とギリシア文字対照表

字母	音価	数 価	ギリシア文字	字母	音価	数 価	ギリシア文字
А	a	1	Α (1)	Ѧ	ɣ		
Б	b			Ц	c	900	
В	v	2	Β (2)	Ч, Ѹ	č	90	
Г	g	3	Γ (3)	Щ	št		
Д	d	4	Δ (4)	Ъ	ŭ		
Е	e	5	Ε (5)	Ѣ	y		
Ж	ž			Ь	ī		
З, Ѹ, 3, 3	dz	6	[Ζ (6)]	Ѥ	ē		
И	i	7	Ζ (7)	Ю	ju		
І	i	10	Η (8)	Ѧ	e	(900)	
К	k	20	Ι (10)	Ѧ	je		
Л	l	30	Κ (20)	Ѧ	je		
М	m	40	Λ (30)	Ѧ	ja		
Н	n	50	Μ (40)	Ѧ	je		
О	o	70	Ν (50)	Ѧ	i	(400)	
П	p	80	Ο (70)	Ѧ	f	9	Θ (9)
Р	r	100	Π (80)	Ѧ	ks	60	Ξ (60)
С	s	200	Ρ (100)	Ѧ	ps	700	Ψ (700)
Т	t	300	Σ (200)	Ѧ	—	(90)	Ϛ (90)
У, Ѹ	u	400	Τ (300)	Ѧ	—	(900)	ϛ (900)
Ф	f	500	Τ (400)	Ѧ	—		
Х	x	600	Φ (500)				
Ѡ	o	800	Χ (600)				
			Ω (800)				

キリル文字とギリシヤ文字対照表



キリル文字・楷書体

4 古代神代文字 阿比留文字説

古代神代文字に「阿比留文字・日文肥人書 (こまひとのふみ)」がある。対馬 卜部-阿比留家に伝来したので「阿比留文字」と呼ばれる。平田篤胤が阿比留文字を「日文四十七音」として『神字日文傳』で紹介している。書体は横組みと縦組みがある。

「阿比留文字」はハングル文字を元に創作されたとの説がある。

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	
ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	ㅁ	あ
	이	기		미	시	리	디	ㅁ	기	기	い
		기	기	미	시	리	디	ㅁ	기	기	う
	어	기		머	셔	너	디	ㅁ	기	기	え
	이	기	기	미	시	리	디	ㅁ	기	기	お

アヒル文字

4.1 ハングル文字の成立

朝鮮語は15世紀半ばまで、朝鮮語を表記する固有の文字を持たず、口訣・吏読など万葉仮名のように漢字を借りた表記法により断片的・暗示的に示されてきた。ハングル文字は、朝鮮語（韓国語）を表記するための表音文字である。1446年に李氏朝鮮第4代国王の世宗が、「訓民正音」の名で公布した。北朝鮮ではチョソングルチャと呼ばれる。韓国、北朝鮮以外でも満洲や沿海州、シベリア、樺太（サハリン）、カザフスタン、トルクメニスタンなど旧ソ連の一部で、朝鮮民族の居住地域を中心に使用されている。

4.2 平田篤胤とイエズス会

平田篤胤の『古史伝』37巻は^{じんたい}神代のみである。^{もとりのりなが}本居宣長の『古事記伝』を模しているが、文献実証主義からは完全に逸脱している。平田神道は天主教書の影響を受けている。天主教書の原典は、16世紀にイエズス会の布教活動としてアジア各地に宣教師が派遣され、キリル文字で書かれた聖書である。

平田篤胤の国学と天主教教義との接点について、海老沢有道氏は、伊東多三郎氏の研究成果として在華イエズス会士、アレニの著作『三山論学紀』と平田篤胤の『本教外篇』とを比較対照して（『南蛮学統の研究 増補版』）、そこに「改作」を指摘している。

平田篤胤は『本教外篇』において、「『天主』を国常立尊（くにのとこたちのみこと）などに当て、復古神道における創造主宰神観を形成した」（『日本キリスト教大事典』）。

4.3 長尾神社の阿比留文字

4.3.1 長尾神社

長尾神社（倉敷市玉島長尾 2287・小字宮原）は、応永年間（1394～1428）に宇佐八幡宮から再勧請された。天正年間（1573～1593）には毛利備中守隆元の祈願所であった。その後、松山城主池田備中守、同出雲守の新田開墾の祈願所となった。頭番祭（75膳の神饌を調製し神前に供えた後、直会として参列者が戴く。膳は握り飯、頭付きの魚、竹箸）。

4.3.2 長尾神社の阿比留文字 「カムナカラ」

平成 22 年 8 月 29 日に西 廣行氏 (NPO 法人 備中玉島観光ガイド協会 理事長) より写真を送付していただいた。「阿比留文字」の横組みで右から「カムナカラ」と表記されている。

田邊 寛氏 (長尾神社 氏子総代) が「神代文字を検証する 倉敷市玉島 長尾神社」との平成 11 年 1 月の手記を公開されている。要点を抜粋し紹介したい。田邊 寛氏は「阿比留文字である」と、平成 19 年 1 月報告で断定されている。



長尾神社の阿比留文字「カムナカラ」

神代文字「長尾神社の幣殿の南側、石作りの門の笠石に刻まれた不思議な文字について」

従来から^{ジツダイ}神代文字とか、或は朝鮮の古代文字であろうと言われて来た。平成 10 年 11 月 24 日の新穀感謝祭に、福田隆宮司から、韓国高麗大学の金教授説「恐らく朝鮮のハングルで、カムナガラと読む」との説明を受け一応納得された方が多いと思う。

私も感心した一人だが、**落ち着いて考えると色々の疑問が湧いて来た。**早速調べてみた。境内の年号のある石灯籠や、鳥居と比較して見て、**素人目だが江戸中期から後期のものではないか**と思う。

疑問の第一は「カムナガラ」と云う語である。日本書紀孝徳天皇の大化三年 (647) 四月壬午の条に載っているのが初出で、惟神、随神、神随、乍神、神奈我良等とも書く。「カムナガラ」の「ナガラ」は神全体そのものを指している。神は天照大神に帰一する。本居宣長は、「カムナガラは、ある絶対的なもの、つまり神そのものの、時間的、空間的、実現関係を現わしたもの」と述べている。神道にとり神聖な言葉で、日本独特の大和言葉である。

本殿近くの大切な場所に後世迄伝える様、石に彫り込むには眞に相応しい語である。然しそれ丈に何故朝鮮の文字で記るされたかと言う点が引かゝる。まして鎖国時代である。異国を忌み嫌っていた時代である。通信使を通じての交流があったとは言え、当時、格下と思われていた国の、「表面を和平で飾りながら、内面は両国相互の激しい蔑視感、とりわけ日本人の優越感に貧しい国際観の本質を率直にあらわすものであった。」と。しかも古代語をである。世襲が多く幼少より神道を叩き込まれた神職達が果して許るすだろうか。一寸考え難い様に思う。

次に場所に対する疑問である。寺院なら兎も角、国粹色の特に濃厚な八幡宮である。当時朝鮮の通信使一行が鞆の浦、次に牛窓に上陸したのは事実である。その中間の一神社に、万一関係者があったとしても、又其の人が古典文字を心得ていたとしても、「カムナガラ」と云う何とも朝鮮に似つかわしくないと**思える語**を奉納するだろうか。又朝鮮との交易で産をなした人の寄進と考えても同様であり、宮司も亦許るさない様な気がする。

それでは神代文字説は如何。「我国個有の神代から伝えられたと云う文字で、実は亀卜の灼兆シヤクチャウや朝鮮の諺文オンモンに擬した偽作。日文、天名地鎮ヒフミ アナイモ あひる、阿比留文字などの種類がある。

江戸時代その存否について平田篤胤の「神字日文伝」カンナヒフミツタエ＝(存在説)と伴信友の「仮字本末」カナノモトスエ＝否定説等の論争があった。今日では全く否定されている。

二十年程前に鴨方の樋口美智さん(古文書仲間)から、長崎新聞だったと思うが相当大的な記事を見せて貰った記憶がある。平田篤胤は門人 553 人その外、没後の門人と称する者が 1330 人もいたと言うから、その影響力は大きかった。

そこで平田篤胤について調べると思いがけない事が判った。1776～1843 年の人で、安永五年秋田藩大番組頭大和田祚胤ムラタネ禄高百石の第四子で、20 才の時江戸へ出奔。寛政十二年(1800、二十五才)備中松山藩士平田篤隠アツヤスカ(禄高五十石)の養子となり、文政六年(1823)藩を辞する迄 23 年間、働き盛りを松山藩士として活躍していたと云う点である。餘り大きくもない備中松山藩の事、高名な国学者で神道の権威者篤胤と、世襲の長尾八幡宮司(太田氏)とは当然接觸があった事と思われ、想像を逞しうすると師弟か、又はそれに近い関係ではなかったろうか。

●長尾は寛延元年(1748)以降は丹波亀山藩領。

●玉島は松山藩領

神代文字を肯定し、神代の昔から個有の文字があったとする説は、古典にも通じ、神国を信ずる心の深い神職達には極めて受け入れ易かったと思われる。神主や篤信者達が「日本には漢字渡来以前から比の様に立派な個有の文字があったのだ」と誇り高く、所謂神代文字で彫らせたものではないかと云う気がする。境内の同時代の石造物に比べても大きく仲々立派である。

神代文字についても論争のあった「神字日文伝」カンナヒフミツタエや「仮字本末」カナノモトスエ、更に否定論を決定的なものにしたと云う山田孝雄の「所謂神代文字の論」等を読んで少し研究したい気もするが、老憊羸弱、氣力も体力も続かないのが残念である。

それでは韓国の学者が解読出来た理由は如何。

私は、神代文字を創り出した学者達が、亀卜灼兆キノボクシヤクチャウ(古代中国で亀の甲を焼いて、できた裂け目で吉凶を判じたらうらない。)や朝鮮の諺文オンモンに擬して創り出したものならば、そのルーツが近いので、古典に造詣の深い金文吉先生なら解読されても不思議はないと思う。

20 年程前、古文書コモンジョの恩師 原田満左右先生が長尾神社へ参詣の節、此の文字に関心をもたれ、留学生を通じ韓国の先生方に調べて貰ったが、サッパリ判らなかつた。

神代文字は根拠が薄弱だったのか、他に何か理由があったのか、漸次衰え、終戦後は神道に対する考え方の激変もあり、殆ど忘れられてしまったのではなからうか。

少しでも比の文字や長尾神社、更に長尾の歴史に関心を持ち、敬神崇祖の念を高めて頂けたらとの思いから、不馴れで拙い一文を、敢て呈した訳である。若い人達にその氣運が生じ、散逸した陶の太田宮司家文書や、長尾の古文書類コモンジョを探し求め、又岡山大学に保管されていると聞く「坡南小野家」ハナナの厩大な文書等に関心を持って頂けたら大慶至極と思う次第である。

平成 10 年 12 月 吉日

長尾神社氏子総代 田邊 寛拜草

出雲神道の流れくむ“神代文字”見つかる〔長崎新聞〕

廃仏毀釈はいぶつきしやくの盛んな明治維新期に、大陸から伝わった漢字を排し、我国古来の神道を崇拜する“神代文字”かみよを吹聴する一時期があった。この珍しい神代文字が、長崎市鍛冶屋町の天満宮から見つかった。神代文字が残されていたのは、明治二年に当時の今籠町（鍛冶屋町）に建った天満宮に取り付けた二枚の古びた板。約1寸と20分ほどのもので、“屋船豊宇気姫命”などの神の名を墨で記してあり、この漢字の上に四角や円、矢印記号などを組み合わせた、**一見、朝鮮文字に似た文字**があった。

長崎市立博物館の越中哲也館長によると、「明治初期に神道が復活し、国学者らが中心になって、“日本には、漢字が中国から伝わる前に神の時代から文字があった」と提唱。出雲神道の流れをくむ国粹主義者らが、朝鮮文字などをまねて作ったのがこの神代文字で、明治二十年代には廃れた」という。(昭和53年11月15日)

追記

平成11年の歳旦祭のあと、畝川本子さん（福田睦雄先代宮司の姪）に長尾神社の石彫文字について私の調べた所をコピーしてお渡しした所、こゝの所が違う。

「金文吉先生は朝鮮の古典文学に造詣が深いので解読されても不思議はない。」と云う点で、実は「神代文字でカムナガラと読む」と説明し、少し許りの資料を差上げたのは私だと云われる。よく聞いて見ると、本子さんの母歳枝さんは先々代金市宮司の娘で、先代宮司睦雄先生の姉であり又父の英男さんも神道に大変関心をもち、共に金市宮司から、「これは神代文字と云う深い謂れイワレのある文字で、カムナガラと読むのだ」と繰返し聞かされている。又近年学会でも話題に上るのか先生方が何人か尋ねて来られ、いつも此の話をさせて頂いている。

金文吉先生は2～3年前突然見えられ、韓国でも最近此の文字に対する関心が高まっており、研究の為やって来たとお話したので、知っている限り説明させて頂いたとの事。本子さんの話で、成程そうだったのかと思ったが、同時に、学者は傳承を鵜呑みにする程生易ナマヤサしいものではないと氣付き、福田隆宮司よりお借りした金文吉先生のビデオ『歴史探求 日本の神社のハングル』（平成8年10月 韓国釜山放送局・取材は平成8年7～8月）により御研究の跡を辿タドって見ることにした。残念ながら韓国語の解説が多くて判り難かったが、数回繰返ししているうち、多少は理解出来た。

第一番に訪れられたのは長船町の大内神社である。日本文化の粹とも云うべき備前長船刀鍛造の地である。立派なお社で拝殿の廂の下に問題の文字があった。木彫りの様に思えた。宮司は留守だったのか、氏子総代の様な老人が「サッパリ判らない。何でもよその國からきたのだろうと云われている。」と丈。由緒ある土地柄故、期待していたが聊かガッカリした。

次で**長尾神社**である。福田隆宮司の案内で、玉串奉奠の後、石門前で宮司より「カムナガラと読み神様が昔から歩いて来られた道と云う意味だ。」との説明を受けられた。宮司も餘り深遠な事を言ってもと思ひ、簡明にされた様な氣がした。解説はなかった。

次は北九州の**英彦山神宮**。神代から続くといわれ、大変由緒ある古社である。多分高千穂宮司だと思うが、徐ろに拵オモムげられた古文書の表にはハッキリ神代文字と墨書されており、内側に例の記号の様な字が列んでいた。宮司の説明には「判らない事許りだ。当社は

古来修験道の本山で、山伏達は皆口伝^{クワデン}で覚え、文書にしるさない為に残っているのが不思議と話して居られた。参道の岸壁にも飛天像の傍に少し残っていた。

長尾神社、英彦山神宮と神代文字が続いて出た為か、又は以前から関心を持たれていたのか、図書館を訪ねて平田篤胤の「神字日文伝」を借覧された。日文と諺文^{ヒフミ ハングル (オンモン)}と比較研究され、弥々自信を持たれた様子で、雨森芳洲^{アメノモリホウシュウ}旧宅へ向われる。「近江国伊香郡雨森の出身、十七、八才で江戸に出、木下順庵の門に入り、後その推擧により対馬藩に仕え、文教を掌る。常に韓人と応接し、通訳なしに会話出来、韓国語の研究にも成果をあげている。通信使に対する処置については、新井白石と全く意見対立…云々」とあり。又館長の話しにも「芳洲は少しでも多くの人に通訳なしに話の出来る人材を育てる為、懸命に努力された。」と云う。遺品等を見ても此所のは間違いなく諺文だと感じた。

次で四国に渡り、吉野川の辺^{ホトリ}と思う、岩雲神社^{イシヅミ}に参詣、石文等を研究される。宮司から「花田さんは、青雲の志を抱き、岩雲を出て平田篤胤に師事、業成りて帰国するも、後年再び篤胤について学び、大成された。」との説明をうけた。神代文字と云う言葉は聞かれなかったが、大きな接点があったのだと確信した。

以上ビデオを見て感じた事は、金文吉先生は各所で謎の文字の遺物を親しく見られ、解説も出来たので、自信をもって「朝鮮の諺文^{ハングル}と思う」と福田宮司^{ヒフミ}え告げられたのだと思う。

金文吉先生の立場とすれば当然の見解であり、「篤胤が最も確実だと主張した日文^{ヒフミ}にしても、李氏朝鮮^(一四四六)世宗の制定した諺文^{ハングル}の影響下にある事明白で、今日では全く否定されているとの記載を裏付けてもいる。然しこれは当時所謂神代文字が、かなり多くの人に信ぜられ相当広範囲で行なわれていたと云う事実の否定にはならない。私は此のビデオで英彦山神宮でハッキリ神代文字と墨書があるのを確認出来たし、**長尾神社の疑う餘地の少ない宮司家の伝承**や、岩雲神社の花田宮司と平田篤胤の深い関係が判り、今迄の想像が或程度裏付けられたものと思う。又畝川本子さんの話で、石門の建替られた明治三十年は先々代金市宮司がパリパリの現役で、伝承も亦確かと思われ、後書^{アトガキ}の想像がまんざらでもなかったとホットしている。

先日、平成 11 年 1 月 8 日連島宝島寺の寂巖研究会で住職の釈子哲定師から聞いた所によると、寂巖和尚 (1702~1771) の著書にも神代文字の記載があるとの事、道友の三宅昭三さんも記憶していた。一度よく調べて見たいと思う。

住持は又「神代文字は伊勢神宮の流れ、修験道の流れ、他にも諸流があり、起源は室町時代迄遡るのではないかと聞いている。」との事であった。

又三宅昭三さんは「朝鮮通信使は漢文を用い、ハングルは格下として使ってない筈」と説明してくれた。これも大いに参考になると思う。(朝鮮史 第四章 北村秀人著)

以上種々考え合せ、神代文字は実際の起源はどうであれ、文字を遺した人達は、心から信じ、誇りをもって刻まれ、記されたものと思う。

世宗の諺文^{オンモン}制定は室町中期文安三年 (1446) にあたる。長尾神社の石彫文字も宮司家伝承の通り「所謂神代文字」に間違いはないと思う。出来れば更に決定的、直接の証據が欲しい。今後の研究で、創建当時の宮司の記録や関係者達の古文書、平田篤胤と宮司達の関係、石彫文字の確実な年代等が明らかになればと思う。

平成 11 年 1 月 15 日 田辺 寛記

4.4 神代文字と大内神社

大内神社の神代文字に関する論文は、『神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良』金文吉氏(韓国・釜山外国語大学校教授)のみである。要点を抜粋し紹介したい。

「一. 神代文字ができたきっかけと母型」で、**日本神代文字を国学者平田篤胤の偽作と断じている。詳細を紹介したい。**



阿比留草文字と阿比留文字

「日本神代文字が作られたのは江戸時代末である。これを作ったのは、国学者平田篤胤である。彼は 260 年間続いてきた幕府政治を終わらせ日本の国民に古典の神秘性を伝えようとして偽作したのであった。この神代文字が作られた時期は 1811~1819 年にかけてで、『古史徴開題記』四巻本において論じられた。同書は春・夏・秋・冬の四巻にわけられるが、この神代文字自体は春巻の中で「神代文字の論」として書かれている。・・・

平田篤胤は神代文字を二通り作っている。一つはここまでに説明した真書体であり、もう一つは草書体である。「この神代文字の草書は地方によって少しずつ違った使われ方をしている。たとえば奈良県の三輪神社に保管されている草書と、神奈川県の鶴岡八幡宮に保管されている草書は字の形が少し違う。」

三. 神代文字と大内神社

筆者は日本学(日本文化史)の研究で数年間を神戸で過ごした。所属していた学科は年に数回古跡探索を行っていた。

一度備前(岡山県)の大内地方を踏査したことがある。この地方は備前焼で有名であるが、この焼き物は、おもに韓国から流れてきた文化のひとつであって、よく知られているように、**韓国の新羅時代にこの地方に伝播した新羅土器**である。調査チームが駅に降りて足を運んだのは大内神社である。境内に入ってまず目を引くのは日本の神代文字である。神社本殿の屋根の正面にハンゲルである神代文字が刻まれている。木の皮で屋根が作られていて、そのひさしの右側に「神寶記」と書いた木の板がかけられている。神代文字はこの神社の神宝という意味である。「神寶記」は本のように作られていて、昔の文字である神代文字を祭っていると説明されている。「神寶記」と共に掛けられている筆もある。この筆で神代文字を書いたという意味であろう。その横に神代文字が掛かっている。神代文字は二種類に分けてかけられている。ひとつは真書体である「肥人書」で、もうひとつは草書体の「薩人書」である。

大内神社を訪れる人々はまず神代文字がかけられている屋根を見て参拝する。筆者は参拝客に、屋根の下のところにかかれている文字は何の文字ですかと尋ねると、皆が次のように答えた。遠い昔の日本の文字ができる以前の、神代の時代の文字であるという。ではどうして神代文字を見て、柏手を三回打ちお辞儀をするのかと尋ねたところ、**大内神社は神代文字を祀る社であり、昔から学問の成就を祈願する神社**であるから訪ねてきたと語った。要するに、この神代文字を参拝して、受験生は知恵を授かり合格できることを願うのであろう。筆者が参拝客の話聞いて思ったのは、日本の神社の祀る神はその種類が多様である。若い男女の縁を結ぶ縁結びの神があり、商売をする人が繁盛を祈願する商売の神があり、また勉強する人が試験に合格するようにと祈る学問の神もいる。

大内神社は参拝客の言葉どおり、神代文字を奉納する学問の神を祀る神社で、この神社に参拝すればどんな試験でも合格できる、と信じられている。それでは大内神社に掲げられている神代文字はどういう意味をもって表示されているのかを解いてみよう。

<図 8>の神代文字の原案となった文字を見てみると、■字は■字と表示されるべきものが■に表示されたものと推測され、■は神代文字四七字に無い字である。これをハンゲルに直してみると「■■■■■■■■■■」となる<図 9>。

「■■■■■■■■■■」はオホウチノヤシロ、すなわち「大内神社」という意味である。古代より近世まで神社は全て「やしろ」と言っていた。“氏神が定着したもの”という意味でつけられたものである。岡山にある**大内神社は大内氏の先祖を祭る神社**である。岡山地方を治める氏族が大内氏であった。

大内氏族の系譜では、六一一年推古天皇の時百済の聖明王の三番目の息子である琳聖(りんしょう)が周防(山口県)吉敷(よしき)の大内村に土着して、山陽地方と山陰地方一帯に子孫を繁栄させた、と伝えられる。岡山大内村にも社を置き、勢力を繰り広げていたという。両地方には大内という地名を持つところが多い。

5 考察

① 金文吉 教授はハンゲル語で、「オホウチノヤシロ」と解説され、野崎 豊先生(神道考古学・神社考古学)は神代文字・阿比留(アヒル)文字で、「オ(オ)ウチノヤシロ」と説明される。私の阿比留(アヒル)文字による解説は、「オ○ウチノヤシロ」である。○の部分金文吉 教授は「ホ」、野崎 豊先生は「オ」と推定された。

重要なのは○の部分は何故、誤記したかである。吉崎志保子氏(備前市大内在住の郷土史家)は、『歴史研究会第 187』1976 年「備前香登村祀官 川崎田豆雄」に、「備前市大内(おおうち)」とルビしている。一般に大内という文字にはルビは不要である。しかし、吉崎志保子氏はルビが必要と考えられた。矢部秋夫氏は『瀬戸町地名考』で大内(おおち)を、『大内の語源については、大内は「おほち」で「おほうち」の転』と説明している。オオウチであれば、「オ」は正確であり間違えるはずはない。

大内山の「オ○ウチ」を、私は「八岐大蛇(ヤマタノオロチ)」の「オロチ族」と推定している。岡山市東区草ヶ部に大蛇との字がある。「大内山一体に一大製鉄産地(八岐大蛇とは突蕨よりの渡来人の作った溶鉱炉)があった」との仮説である。物部氏の末裔が代々宮司職を継承する備前国赤磐郡一宮・布都之魂神社(岡山県赤磐市石上字風呂谷)との関係で

ある。金文吉 教授の「大内氏族の系譜説」は確認できなかった。

② 金文吉 教授のハングル語説、「日本神代文字を作ったのは、国学者平田篤胤である。平田篤胤は神代文字を二通り作っている。」は時代考証が不足している。論文「神代文字と大内神社」の内容が、田邊寛氏報告の『歴史探求 日本の神社のハングル』平成8年10月放映 韓国釜山放送局 ビデオ」と異なっている。田邊 寛氏の調査報告には説得力がある。

③ 大内神社本殿が元禄 16 年(1703)に再建された時に、「^{からはふ}拝殿の向拝、唐破風、^{うのけとおし}古代文字を彫刻した^{うのけとおし}兎の毛通し」は、関係者の記憶により製作されたものである。木材の外観の退色より推定し、本殿再建と「^{からはふ}拝殿の向拝、唐破風」は同時建築と考える。

平田篤胤氏(1776～1843)の生誕は1776年である。生誕73年前の製作となる。

越中哲也氏説(長崎市立博物館)、「明治初期に神道が復活し、国学者らが中心になって、“日本には、漢字が中国から伝わる前に神の時代から文字があった”と提唱。出雲神道の流れをくむ国粹主義者らが、朝鮮文字などをまねて作ったのがこの神代文字で、明治二十年代には廃れた」についても大内神社には該当しない。江戸末期の大内神社宮司は川崎頼母氏であり、養子の川崎田豆雄氏が明治3年43歳で大頭役を仰せつかっている。川崎家に何らかの伝承が残されていると考える。

④ 金文吉 教授のハングル語説が正しいとすると、**ハングル語の起源がキリル文字**となる。ハングル文字は、朝鮮語(韓国語)を表記するための表音文字である。1446年に李氏朝鮮第4代国王の世宗が、「訓民正音」の名で公布した。母音と子音を分解して作られた文字である。ハングル語の字形起源には起一成文図起源説、パスパ文字説などがある。

⑤ 阿比留草文字・日文草書との比較

金文吉 教授は大内神社「^{からはふ}拝殿の向拝、唐破風の^{うのけとおし}兎の毛通しの古代文字」もハングル文字とされている。

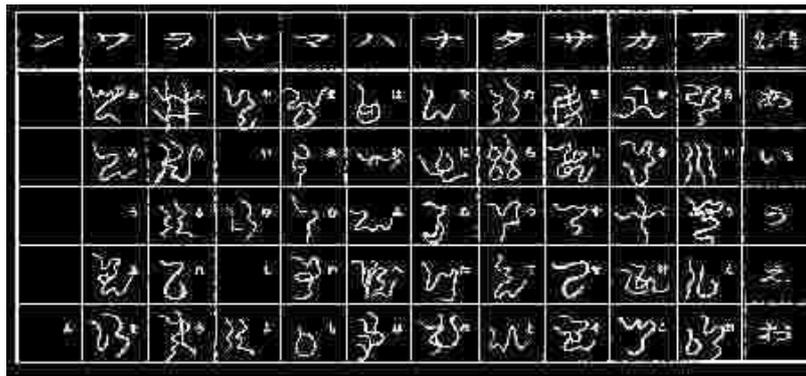


阿比留草文字と阿比留文字

阿比留草文字は阿比留文字の草書体である。13種類の書体が確認されている。藤原不比等や平将門、源頼朝らが阿比留草文字で書かれた奉納文を伊勢神宮へ献文している。

私の阿比留草文字による解読は、撮影角度が悪く不鮮明であるが、**子**は明確に読み取れ

る。阿比留文字「オ○ウチノヤシロ」の草書体である。



阿比留草文字

⑥ 古代物部文字(阿比留草文字) 唐松神社「ヒフミ誦文」^{しょうもん}

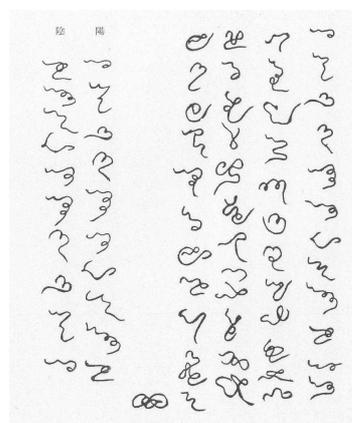
唐松神社^{からまつ} (韓服宮^{からまつのみや}:秋田県大仙市協和境字下台) の文治4年(1188)に書写された『天津祝詞』^{のりと}には、古代物部文字(阿比留草文字)で記された「ヒフミ誦文」^{しょうもん}が含まれている。

西モンゴル・ツェツェルレグ市の県立博物館の庭に亀趺の上に立つブグト碑文(建立570～580年頃)が有る。ブグト碑文には古代のソクド文字が彫られている。ソクド文字には数種類の文字の形態がある。古代物部文字にブグト碑文のソクド文字のみが類似している。物部一族と古代モンゴルとの結び着きに注目している。唐松神社は物部氏の末裔が代々宮司職を継承する神社である。法隆寺の香木に焼き記された文字が1986年東野治之氏の調査がきっかけとなり、吉田豊氏(神戸市立外国語大学教授)によってソグド語と特定された。法隆寺は607年建立である。

進藤孝一氏は、物部氏の出自を「天降り伝承を持ち、緑なす森林を崇拝する氏族、朝鮮半島以北の緑の少ない地域の出であろう。北方系の蒙古族が朝鮮半島を經由して天降り・神宝などの伝承を取り込み、日本列島に渡来した説もある」としている。

唐破風の古代文字は撮影角度が悪く不鮮明であるが、ソクド文字に類似している。

私は古代文字・神代文字と称される文字は、全て渡来人の故郷の言語と考えている。古代物部文字(阿比留草文字)で記された『天津祝詞』ヒフミ誦文は文治4年(1188)書写とされている。



ボガト(ブグト)碑文のソクド文字

唐松神社の古代物部文字

⑦ 「アヒル」と「カモ」

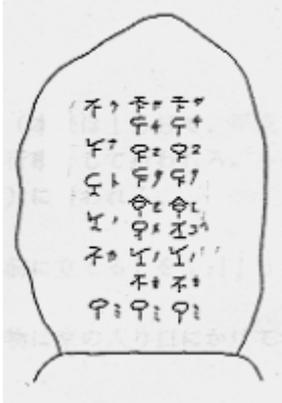
「阿比留文字」は、対馬 ト部-阿比留家に伝来したので阿比留(アヒル文字)と呼ばれる。この阿比留家のアヒルを考察したい。中国語の「鴨(ya)」とはアヒルのことである。カモ、カリ、ガン、オシ、アヒルは類似名である。阿比留氏とは鴨(加茂・賀茂)氏である。

⑧ 古代文字 所蔵社寺名

^{からまつ}唐松神社 (秋田県大仙市)、英彦山神宮(福岡県田川郡)、岩雲神社(四国)、川上神社(岡山県小田郡矢掛町)、法隆寺、三輪神社、鹿島神宮、出雲大社(出雲文字)の他に、丹生神社(三重県多気郡丹生村)、二荒山神社(栃木県日光市)、赤間古墳(下野郡)、貫前神社(群馬県富岡市)、石上神宮(奈良県天理市)等が知られている。

^{としろう}田邊肅郎氏・西廣行氏報告・『神代文字図鑑』収録より抜粋

<p>京都北山 金毘羅山山頂 コンクリート製 「アメノミナカオヌシオカミ」 「天之御中主之命」</p> 	<p>宮崎県北諸県郡山之口町 ^{まどの}円野神社 奉納「師走吉日 奉る 根内に塩1年」 祠官 内藤利政</p> 
<p>徳島県阿波町岩津の浜 大鯰の歌碑 歌人 岩雲花香翁 文久2年(1862)8月</p> 	<p>愛知県田原市芦町柿ノ木 12 阿志神社 瓦</p> 
<p>長野県安曇野町 道祖神</p>	<p>群馬県前橋市富士見町赤城山 4-2 赤城神社 神代文字碑 赤城神社境内</p>

	
<p>東京都あきるの市 阿岐留神社 御札</p> 	<p>東京都渋谷区代々木3丁目8-10 平田神社 御札</p> 
<p>新潟県佐渡郡畑野町 足尾神社 石碑</p>	<p>長野県安曇野町 安閑神社</p>
<p>徳島県徳島市上八万町上中筋558 宅宮神社 奉納版木</p>	<p>香川県小豆島 応神天皇 来島記念碑 西暦291年9月建立。</p>
<p>宮城県本吉郡唐桑町崎浜2-3 御崎神社 唐桑古碑(クエラ鯨塚碑)</p>	

6 まとめ

① 『竹内文書(神代の万国史)』の「神代文字の発明」に、「^{あひるもじ}天日字日球神ノ丸形依り字作り定ム。^{ぞかたがなもじあひるくさほもじ}像形仮名字天日草体字作り定ム^{いそいもじ}五十一字作り」とあり二種の文字が紹介されている。阿比留文字は『^{くかみ}九鬼文書』では「^{くかみ}大中臣神字秘遍 原体文字」と表記され、阿比留草文字は、「変体文字(一)」と紹介されている。

② 『九鬼文書』の「大中臣神字秘遍」に注目した。古代天皇家の神事・祭祀を担当していたのは中臣氏と忌部氏である。中臣氏は代々神祇官・伊勢神官など神事・祭祀職を世襲した。阿比留文字とは渡来人中臣氏の故郷の文字である。熊野本宮大社・^{くかみ}九鬼宮司家『九鬼文書』の九鬼家は、^{おおなかとみ}大中臣神道の^{そうけ}宗家で熊野別当宗家である。

③ ^{たけたにちえ}竹田日恵氏(相模工業大学学長)は、「^{さんか}山窩は皇室祭祀に奉仕した^{くかみ}忌部氏の一族」に、

「山窩さんかの研究に 33 年の歳月を費やした三角寛みすみかん氏の研究論文によって明らかにされた。・・・三角寛みすみかん氏の研究で重要なのは、秘密を守る場合にしか用いないサンカ文字の存在を公開したことだろう。その文字は竹内文書の原本を記していたのと同じ神代文字(アヒル草文字)であった。この文字は太古において神事に用いられたもので、一般人の使用は許されていなかった。このことから山窩さんかの祖先が、皇室祭祀に奉仕した忌部氏いもべの一族であることがわかる。」と報告している。

忌部氏は中臣氏と共に古代の皇室祭祀に奉仕してきた氏族である。大内神社に中臣氏(阿比留文字)と、忌部氏(阿比留草文字)奉納文字が並んでいる。古代祭祀研究の大発見である。天磐戸神話・天孫降臨神話の邇邇ににぎのみこと芸尊いつとものおの降臨に随伴した五伴緒が中臣氏と忌部氏である。古代吉備(黄蕨)国を解くキーワードは備前市香登大内となる。

④ 古代物部文字は阿比留草文字である。阿比留草文字は忌部氏文字でもある。古代物部文字にブグト碑文のソクド文字のみが類似している。物部氏、忌部氏と古代モンゴルとの結び着きに注目したい。物部氏も忌部氏も突蕨国からの渡来者となる。

⑤ 阿比留文字に別伝がある。原田実氏が紹介している。平田篤胤が入手した「阿比留中務なかつかさより出て備前国奈加郡に伝承された文字」がある。その文字を吾郷清彦氏が入手した。その文字は「備前国奈加郡阿比留中務」の伝として近衛家に蔵せられていたものだという。「備前国奈加郡」については史料による確認は取れない。備前市香登と推定している。

⑥ 阿比留文字の書体に横組みと縦組みがある。殆どが縦組みである。横組みを確認できたのは長尾神社と赤城神社(群馬県前橋市富士見町赤城山)のみである。横組み書体は平田神道の原点、「天主教・キリル文字」の影響である。

7 謝辞

- ① 平成 22 年 6 月 26 日に大内神社の古代文字の写真を、土井通弘先生(就実大学教授)にお見せしたところ、一目でハングル文字と教示された。
- ② 長尾神社の阿比留文字については、平成 22 年 8 月 22 日に野崎 豊先生(神道考古学・神社考古学)より教示を受けた。
- ③ 平成 22 年 9 月 10 日に福田真人宮司に長尾神社の阿比留文字を御案内いただき参考資料を戴いた。後日、田邊 寛氏より研究経過をお聞きした。ご指導に深く感謝したい。

8 参考文献

- ①『創立 25 周年記念誌 わがまちの文化遺産』備前市中央公民館 平成 10 年 備前市文化協会
- ②『ブリタニカ国際大百科事典-1』1972 ディビエス・ブリタニカ
- ③『図説アジア文字入門』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2005 河出書房新社
- ④『ロシアの文字の話』小林潔 2004 東洋書店
- ⑤『文字の起源と歴史』アンドルーロビンソン 片山陽子訳 2006 創元社

- ⑥『文字の歴史』ステイヴン・ロジャー・フィッシャー 鈴木晶訳 2005 研究社
- ⑦『神の里 岡山県の神社』渡辺秀治 平成4年
- ⑧「備前香登村祀官 川崎田豆雄」吉崎志保子『歴史研究会第187』1976 新人物往来社
- ⑨『大英博物館双書 失われた文字を読む④ 初期アルファベット』ジョン・ヒーラー 竹内茂夫訳 1996 学芸書林
- ⑩『古代文字の解説』高津春繁 関根正雄 昭和45年 岩波書店
- ⑪『日本語上古代文字(神代文字)考』<http://www.marino.ne.jp>
- ⑫『平田神道と国家神道』 <http://www.aguro.jp/d/file/r/reli42.htm>
- ⑬『平田篤胤』 <http://www.geocities.jp/agosu22000/page052.html>
- ⑭『神代文字を検証する 倉敷市玉島 長尾神社』
<http://www.geocities.jp/hiroyuki1195/nagao-zindai.doc>
- ⑮『神道史大辞典』藺田稔 橋本政宣編 2004 吉川弘文館
- ⑯『神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良』金文吉 韓国・釜山外国語大学校 教授 <http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/forum/text/fn155.html>
- ⑰『瀬戸町地名考』矢部秋夫 平成11年
- ⑱『長尾町誌』花田一重・守屋武士編 昭和26年 長尾町文化会
- ⑲『古代出雲帝国の謎』武智鉄二 昭和60年 祥伝社
- ⑳『定本竹内文献』武田崇元 昭和59年 八幡書店
- 21『九鬼文書の研究』三浦一郎 昭和61年 八幡書店
- 22『超図解 竹内文書Ⅱ』高坂和導 1995 徳間書店
- 23『賀茂探求(44)カモとアヒル』
<http://www.ffortune.net/fortune/onmyo/kamo/kamo44.htm>
- 24 フリー百科事典『ウィキペディア』
- 25『図説 神代文字入門』原田実 2007 星雲社
- 26『秋田「物部文書」伝承』進藤孝一 1984 無明舎出版
- 27『秋田・唐松神社にて』<http://www.nippon-bunmei.jp/tsurezure-10.htm>
- 28『世界の文字の図典』世界の文字研究会編 平成5年 吉川弘文館
- 29『竹内文書が明かす 超古代日本の秘密』竹田日恵 平成10年 日本文芸社
- 30『長尾神社由緒略記』長尾神社
- 31『長尾神社御由緒略記 付 神代文字 其の他』田邊寛 平成19年1月
- 32『歴史探求 日本の神社のハングル』平成8年10月放映 韓国釜山放送局 ビデオ
岡山大学大学院生(韓国留学生)による邦訳文
- 33『神代文字図鑑』<http://www7b.biglobe.ne.jp/~choreki/mojizukan1.htm>
- 34『ネガのキリシタン史』
<http://yasuraoka.cocolog-nifty.com/toma/2009/03/post-7ae9.html>